

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770117

研究課題名(和文) 欧米文学における社会文化的観点から見たエイズ表象形成の研究

研究課題名(英文) A socio-cultural study of the development of early AIDS representations in Western Literature

研究代表者

内藤 真奈 (Naito, Mana)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・研究員

研究者番号：00727399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀末の欧米社会に多大な影響を及ぼした病気であるエイズについて、エイズ表象の形成課程を考察した。欧米社会に病気が蔓延し始めた1980～1990年代までに執筆された文学作品を対象に、前代未聞の病気がどのように文学イメージとして描かれたかを詳細に検討した。(1)エイズ文学の代表的作家エルヴェ・ギベールの作品に見られる病気表象、(2)エイズに関連した自伝的作品における病気、および患う主体の視覚的イメージ、(3)文学と映画という異なる表現手法に見られるエイズ表象の相違、(4)盲人表象を通して見る視覚的イメージ、(5)文学におけるエイズ表象形成に与えたマスメディアの影響について、考察を行った。

研究成果の概要(英文)：My reflection concerns the early representations of AIDS that affected the Western society at the end of 20th century. I collected AIDS writings published between 1980s and 1990s, during the first period of the epidemic, and analyzed how this new and unprecedented disease was transformed in literary images. I considered (1) AIDS/HIV representations in Herve Guibert's writings, (2) Visual images of AIDS/HIV and person suffering from the disease in autobiographical writings, (3) Different ways of representing AIDS/HIV in literature and movies, (4) Visual images seen through blindness, (5) Influences of mass media on AIDS representations in literature.

研究分野：人文学

キーワード：フランス文学 エイズ 病気文学 自伝文学 隠喩 エルヴェ・ギベール シリル・コラルル イメージ論

1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代以降のフランスにおいて、自伝文学はオートフィクション(自伝的虚構)と呼ばれる新たな地平を切り開いた。目の前の現実と作家によって想像される虚構との拮抗した関係の上でなされるこうした文学創作、とりわけ当該分野の代表的作家エルヴェ・ギベールの作品において、病気の表象が重要な役割を果たしていることが、先行研究において明らかとなった。

(2) 文学作品であると同時に、エイズに侵された者の証言という側面を併せ持つエイズ文学作品は、エイズという現代社会を襲った悲劇的現象を鮮明に描き出している。これらの作品を考察対象にすることで、西洋世界で引き継がれてきた自伝文学の伝統に新時代がもたらした変化である、自伝的虚構を用いた創作の側面を明らかにすることができる考えた。

(3) エイズ文学作品のこうした特徴をより普遍的観点からとらえるために、ギベール研究の成果を出発点として、エイズに苛まれる個人の姿を描いた同時代に創作されたエイズ関連の自伝的作品を対象に研究を行う重要性が認められた。

2. 研究の目的

(1) エイズという病気を表現するためにどのような伝統的イメージが活用されたか、また、文学作品がエイズの一般的イメージに対していかなる独自のイメージを提示しているかを明らかにすること。この作業を通して、前時代の病気表象との比較を行い、エイズ表象の特徴を浮き彫りにすること。

(2) エイズについて同時代に書かれた作品を比較することで、病気というテーマに関して同一文化圏で共有される文化イメージを同定すること。

(3) 以上の考察を通して、フランス文学史の中にエイズ文学作品を位置づけ、その価値を問うこと。

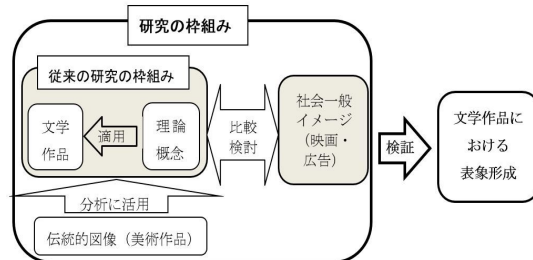
3. 研究の方法

(1) エイズ文学作品から病気が視覚的イメージとして表されている箇所を抽出し、個々の作品の独自性に留意しつつ、エイズ表象を類型によって分類する。

(2) (1)で抽出・分類されたイメージと伝統的図像資料、とりわけエイズ以前に西洋社会に到来した病気に関する図像学的資料を比較する。この作業を通して、西洋社会に伝統的に見られる病気表象のあり方を分析するとともに、エイズ表象に特有の特徴を浮き彫りにする。

にする。

(3) 研究の対象期間に、映画や広告といったマスメディアが流布した映像資料を(1)で抽出したエイズ文学における病気表象と比較対照することによって、「社会の被った災厄」という社会的対象としてのエイズとは異なる、個々の主体が体現するエイズのイメージを浮き彫りにする。



4. 研究成果

(1) エルヴェ・ギベールの『ぼくの命を救ってくれなかった友へ』『憐れみの処方箋』『赤い帽子の男』を中心とするエイズ関連作品における病気表象について詳細な分析を行い、病気が単なる「自伝的現実」にとどまらず、新奇性、流行当初に見られた不確実性などエイズ特有の性質が、オートフィクション(自伝的虚構)を創作する過程で極めて重要な役割を果たしていることを明らかにし、書籍『L'Univers d'intimité d'Hervé Guibert (エルヴェ・ギベールの親密な世界)』としてフランス語でまとめ、刊行した。病気表象を出発点として現代社会における自己表現のあり方を考察した、先駆的な研究成果であり、フランスの文学研究関連サイトに紹介され、エルヴェ・ギベール公式ホームページ他に書評が掲載された。

(2) ギベール研究の成果から出発し、ギィ・オッカングムの『イヴ』、シリル・コラルの『野性の夜に』、パスカル・ド・デュージュの『命の船』、アラン・エマニュエル・ドルイユの『取っ組み合い』、ジュリエットの『なぜ私が』、バルバラ・サムソンの『不真面目な十七歳』など、同時代に書かれた作品を分析対象とし、作品内に見られるエイズ表象を分析した。分析の結果、闘病生活を表す「戦争」、死を前にした内省生活を表す「航海」、排他性を表す「血統」「貴族」、時代の犠牲者あるいは予言者としての「殉教者」「呪われた詩人」といった多岐にわたる伝統的イメージが駆使されていることが実証された。さらに「早すぎる老化」「時空間を旅する病人」というエイズ特有のイメージが発見された。「初期エイズ文学(1980-1990年代)における病気のイメージ形成」と題して日本フランス語フランス文学会で行った口頭発表が反響を得、学会誌編集委員による審査・選考を経て、学会誌に論文として掲載された。

(3) 文学作品と映像資料との比較として、エイズを描いた映画4作品(シリル・コラルの『野性の夜に』、エルヴェ・ギベールの『憤み、あるいは憤みのなさ』、クリストフ・オノレの『レオに寄り添って』、シャルロット・ヴァランドレイの『血のなかの愛』)をその原作となった文学作品と比較対照した。文学作品と映画のそれぞれを詳細に突き合わせ、そこに見られるエイズの描かれ方の差異を検討することにより、病気をめぐるテキストと映像、それぞれの表現手段の特性が明確に示された。研究成果は「エイズ表象をめぐるテキストと映画の関係」と題し、『仏語仏文学研究』に論文として発表した。ギベールやコラルのように、この分野で名を残した作家の作品についての発展的な研究である点、研究が遅れている作家や作品を積極的に紹介した点において、研究の意義を認められた。文学研究と映像文化論を横断する研究である。

(4) 文学における視覚的イメージについて考察を深めるため、ディドロの『盲人書簡』に代表されるフランス文学作品に見られる盲人の表象をテーマに取り上げ、エイズ表象と密接な関係を持つエルヴェ・ギベールの小説『盲人たち』を対象に分析を行った。視覚の欠如した状態としての盲目に関する考察を通して、研究成果(3)でも認められたように、映画などに見られる映像的なイメージと、文学作品に見られる心理的なイメージとの違いがより鮮明なかたちで明らかとなった。研究成果を論文「盲人をめぐるファンタズム」としてまとめ、『仏語仏文学研究』に発表した。フランス文学において伝統的に描かれてきた盲人という表象を切り口に、文学史を縦断して考察を行い、視覚メディアが発達した現代において、一層の重要性を持ち得る研究テーマとして問題提起を行った。

(5) 1980年代に登場し世界中に衝撃を与えたエイズについては様々な言説が生み出され、新聞雑誌、映画、広告といったマスメディアによって流布された。このようにして広められたイメージは、一般に共有され社会通念として病気のイメージを形成した。当時の社会状況を考慮に入ると、研究成果(2)で明らかとなったエイズ文学作品が提示する病気のイメージは、流布された既存のイメージの影響下で創造されたと見なされることから、両者のイメージの比較分析を行った。その結果、文学創作が病気の社会的イメージに呼応しつつも、反駁するかたちでイメージを作り出していることが明らかとなった。研究成果は「反駁するイメージ—エイズ表象をめぐるマスメディアと文学の関係」としてまとめ、日本フランス語フランス文学会で口頭発表を行った。

(6) 以上の研究を通して、エイズ文学研究において個別に進められている作家研究の成果をつなげ、「病気の視覚的イメージによる分析」という新たな体系の枠が構築された。得られた成果を、ペスト、梅毒、天然痘、コレラ、結核などエイズ以外の病気を対象とした病気文学研究に応用展開することにより、将来的な研究の発展に寄与できると期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

内藤 真奈、盲人をめぐるファンタズム、仏語仏文学研究、査読有、49号、2016、pp. 537-553、<http://hdl.handle.net/2261/61691>

内藤 真奈、初期エイズ文学における病気のイメージ形成、フランス語フランス文学研究、査読有、109号、2016、pp. 205-221

内藤 真奈、エイズ表象をめぐるテキストと映画の関係、仏語仏文学研究、査読有、48号、2016、pp. 149-169、<http://hdl.handle.net/2261/61655>

[学会発表](計2件)

内藤 真奈、反駁するイメージ—エイズ表象をめぐるマスメディアと文学の関係、日本フランス語フランス文学会、2017年6月3日、東京大学駒場キャンパス(東京都)

内藤 真奈、初期エイズ文学(1980-1990年代)における病気のイメージ形成、日本フランス語フランス文学会、2015年10月31日、京都大学(京都府)

[図書](計1件)

Mana Naito, L'Harmattan (フランス), L'Univers d'intimité d'Hervé Guibert (エルヴェ・ギベールの親密な世界), 2015, 281

[産業財産権]

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

エルヴェ・ギベール公式ホームページに
掲載された書評（フランス語）

<https://www.herveguibert.net/universdintimite>

文学研究専門紹介誌『Acta fabula』に掲載
された書評（フランス語）

<http://www.fabula.org/revue/document9501.php>

6．研究組織

(1)研究代表者

内藤 真奈（NAITO, Mana）

東京大学・大学院人文社会系研究科・研究
員

研究者番号：00727399

(2)研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者

（ ）

研究者番号：

(4)研究協力者

（ ）